戦前期日本の女子体育振興に関する史的研究： 大正期を中心として

春日 芳美¹⁾ 友添 秀則²⁾

Yoshimi Kasuga¹ and Hidenori Tomozoe²: Promotion of women's physical education in Japan, with a focus on the Taisho era. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 57: 177-189, June, 2012

Abstract : This study was conducted to understand how women's physical education was promoted during the development of Japan, focusing especially on the Taisho era (1912-1926). First, I reviewed critical opinions about physical education for women prevalent during this period, in order to reveal details of difficulties in promoting it. Secondly, through collection of relevant documents, I examined the measures for promotion of women's physical education that had been discussed during this period. Thirdly, I reviewed the criticism of these promotion measures, in order to reveal the tendencies and problems prevalent at the time.

On the basis of these reviews, I consider that the main reasons why the promotion of women's physical education was not successful in the Taisho era were: 1) women's physical education was not consistent with the traditional social norm of the time, 2) theoretical studies of physical education had not yet been developed, and 3) people at that time tended to regard 'unhealthy-looking' women as beautiful (for example in the works of Takehisa Yumeji). Since it was difficult to solve these problems, some advocates tried to promote women's physical education by emphasizing the beneficial effects of gymnastics rather than conducting theoretical studies. This was promoted by proactively creating a new concept of women's physical education such as appreciation for 'health and beauty'. The measures for promotion of physical education for women in the Taisho era placed emphasis on advertising physical education more effectively rather than improving it qualitatively. The promotion of women's physical education in this manner was criticized by other advocates of physical education, and I consider that this was one reason why the quality of women's physical education remained low.

Key words : women's physical education, concept of beauty, health, history

キーワード : 女子体育, 美人観, 健康, 歴史

I はじめに

日本の学校教育において女子体育が制度的に確立した1900年代以降, その振興は女性観との対立や服装の問題など様々な要因によって非常に困難であったとされる(今村, 1959; 高橋ほか, 2005). このような状況にあった女子体育は, やがて「健康な母」としての女性の必要性が主張さ

れたことによって一般化していったという認識は, 女子体育に関連する多くの先行研究に共通したものであるといえよう(上沼, 1968). しかし, これまでの研究では女子体育振興にとって最も大きな障害のひとつであった「旧来の女性観に照らして体操の動作は女性らしさを欠いていた」(角田, 2000; 竹中, 2004)というような問題が, その時代にどのように考えられていたのか, そしてその問題解決のための取り組みとして女子

1) 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

2) 早稲田大学スポーツ科学学術院
〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15
連絡先 春日芳美

1. Graduate school of sport sciences, Waseda University
2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192

2. Faculty of sport sciences, Waseda University
2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192
Corresponding author y.kasuga@suou.waseda.jp

体育指導者を中心とした「女子体育に関わる人々」がどのような活動を行っていたのかという点については、検討が不十分であったといえる。

そこで本稿では、大正期を中心とする時期の女子体育振興がどのように行われていたのかを明らかにすることを目的としたい。本稿の構成は以下の通りである。中心的な議論に入る前の確認作業として、1900年代前後に女子体育が振興された経緯と、女子体育がおかれた状況がどのようなものであったのか整理し、その後に本稿の具体的な課題として以下の3点を検討していく。まず女子体育に関する批判的言説の検討から、これまで前提とされてきた「女子体育振興の困難さ」の内実がどのようなものであったかを明らかにする。次に、それらの問題を前にどのような振興方策が検討されていたのかを、体育指導者による女子体育振興方策案の主張からみていく。そして、その方策に対する批判の検討から大正期における女子体育振興方策の傾向と問題点を明らかにしたい。

なお、学校教育において「女子体育」という名称が制度上用いられたことはないが、1877(明治10)年の教育令により初等教育以外の男女別学が明記され、以降女子中等教育の重要な役割を担った高等女学校に関する制度において規定された体育制度を女子体育に関する制度としてみるものが一般的であるため、本研究においては女子中等教育において行われた体操科の授業を「女子体育」として用いることとする。

また、引用文は必要に応じ現行漢字とひらがなに改めた。

II 女子体育の制度的な確立

日本の学校教育において女子体育が本格的に取り扱われるようになるのは明治期後半、1900(明治33)年前後のことである。1895(明治28)年、高等女学校規程によって、体操科が必修となった。1901(明治34)年の「高等女学校令施行規則」では、女子体育の目的は「体操は身体の各部を均斉に発達せしめて之を強健ならしめ、四肢の動作を機敏ならしめ、容儀を整え、精神を快活にして兼

ねて規律を守り、共同を尊ぶの習慣を以て要旨とす(第13条第1項)」とされた。その後1903(明治36)年には、中学校の教授要目から1年遅れて「高等女学校教授要目」が公布され、体操科のカリキュラムが示された。その内容は普通体操と遊戯であり、週3時間が充てられていた。またこの要目では、教授上の注意として「体操はなるべく女教員が教授すること」と、女性教員による指導の必要が示された。このような流れを受け、1905(明治38)年以降東京女子体操音楽学校(当初の校名は東京女子体操学校)をはじめとして複数の女性体操教員養成学校が設立された。

女子体育が制度的に確立した背景には、近代日本が経験した戦争の影響があるといわれる。この時期の日本は、日清戦争(1894-1895)、日露戦争(1904-1905)という大きな戦争を経験していた。女性への教育の必要性が認識され女子中等教育が拡大してゆく中で、体操科が正式な教科として採用されたのは、日本人の身体の改善の必要性が実感されたことによるものである。明治期の知識人の多くは欧米への留学を経験しており、そこで彼らは、海外滞在の経験を通して日本人の身体の「矮小さ」を認識することになった。西洋人により関わりの深い社会層であった上層の日本人にとって、身体という可視化される領域の問題は、西洋人との接触において、そして国家としての近代日本を形成していくにあたり、不可避な、そして何よりも改良すべき領域であった(真嶋, 2004)。しかし、日露戦争以前から以後にかけて、身体検査などによって数値化される日本人の身体状況に大きな改善はみられなかったという。そこで注目されたのが女性の健康である。母としての女性の健康は、その子どもの健康にも影響すると考えられ、女子体育が振興されたのだった(角田, 2000)。

しかし、必要性が十分認識されていたかにみえる女子体育は、その振興が非常に困難であったことがすでに指摘されている。女性の服装として一般的であった和装が体操に不向きであったことや、体操の動作がそれまでの規範に反していたことなどがその一因とされるが^{注1)}、個別の要因そ

れぞれの関係は十分には検討されてこなかった。以下では、女子体育振興にとって具体的にはどのような問題があり、それぞれどのような関係にあったのかを女子体育関連言説を中心にみていくことにする。

Ⅲ 女子体育関連言説にみる 女子体育振興の阻害要因

1. 身体活動蔑視と「虚弱」

大正期には女子中等教育機関が増加し生徒数も増えていたが、それでも高等女学校への進学が可能であった女性ごく一部であり、出身階層も高かったことがこれまでの研究でも明らかにされている（天野，1986；菊池，1967）。明治期から大正期における女子体育の対象の中心は進学することが可能な中流以上の階級に属する女性であり、体育による身体改善が必要な女性もまた彼女たちであった^{注2)}。事実、当時高等女学校などに進学した女性たちには「不健康」な人が多かった^{注3)}。彼女たちの健康状態が悪かった背景には、彼女たちが慢性的な運動不足であったことが挙げられる。多くの知識人たちも、この「中流以上」の女性たちの身体改善の必要性を感じていた。学校衛生の生みの親とされる医学者の三島通良（1866–1925）は、女子の体育について問題なのは、家において特に労働をしない中流以上の家庭の少女の身体であり、下等社会の女子はその必要に迫られ日々の労働に服しているため論ずる必要がないと主張した（三島，1902）。彼のような主張は決して珍しいものではなかった（雑賀，1924）。このように「虚弱」が蔓延していた背景には、上流階級における身体蔑視という価値意識があったことが挙げられる。具体的な生活からへだたり、抽象度の高く普遍性があるものほど高貴であるといった序列は、日本におけるエリート学生文化であった「教養主義」にみることができる。教養主義は大正期の旧制高等学校を発祥地とするものであるが、その素地となる思想はすでにそれ以前の日本にもあったと考えられる。そこでは、運動は‘vulgar（野卑）’で浅ましいもので、虚弱な身体

を持っていることが良いことであるかのように考えられた（竹内，2003）。このような思想的背景によって「虚弱」は明治期の日本においてゆるぎない地位を築いていた^{注4)}。さらに体育指導者にとって不都合なことに、日本には色白で線の細い「不健康そう」な女性を美人の典型とする価値観が存在していた（井上，1995）。これは個人の好みの問題ではなく、「一般的な美人のタイプ」としての美人観である。時代ごとの美人に「流行」があるように、美しさの基準は時代の影響を受けるものであり、「健康」がその要素として考えられるようになったのは明治以降であるという（小野，1997）。それまでの日本における典型的な美人の要素は、色白で痩せてはかなげであることであった。そしてこの傾向に拍車をかけたのが、明治期における結核の流行である。戦前の日本では、結核は死に至る恐ろしい病気であった。しかしその現実とは裏腹に、文学などに上げられた結核患者のはかなさが人々の胸に深い印象を残した。美しい女性が美しく青白くやせ細って死んでゆくというように、文学の中で結核はいつも重要な役割を果たしていたために、恋愛や佳人薄命といった言葉は、結核という病と不可分なものと考えられるようになった。また同時に、結核は芸術や学問の分野における天才の病とも考えられた。このように美化された結核のイメージが、「不健康そう」な女性を美しいと考える要因になっていた（福田，1995）。女子体育振興にとって「虚弱」が問題となったのは、それが単に量的に多かったというだけでなく、肯定的に受け止める素地があったためであった。

2. 旧来の女性観との対立

女子体育に対する批判の多くは、女性が運動を行うことや体操の動作が「女性らしく」ないという点に向けられたとされる。明治期の代表的な女子教育者である三輪田真佐子（1843–1927）は、女子体育がおかれた状況について、体操は「女徳」を損なう恐れがあるため一般の父兄はこれを好まず、女性自身も嫌がる傾向があるので学校においても「有名無実」の科となっている、と指摘して

いる（三輪田，1897）。また、アメリカ留学から帰朝した井口あくり（1871-1931）は帰朝後の講演において「今までの風と、まるで違うような事を致すのでございますから、或は他から見て、どうも一体の挙動が女らしくないとか、或は出過るとかというような、との批判を受けるかも知れませぬ」（井口，1903）と語った。従来の女性観と対立する体操をすることは、女性の人格までも傷つけるものであるというような言説が多くの史料にみられ、体操が「女性らしくない」ということは、現在その言葉から受け取る意味以上の抵抗感をもたらしていたことが想像される^{注5}。井口自身も、伊藤銀月が明治の著名人について論評した『当世一百人』（隆文館，明治38）において「天下の醜婦」と評されたという^{注6}。この他にも井口は「私は女のくせにこんなことをやってるものですから、兎角世間の同情がありません。近頃この地（秋田：著者注）の新聞にも何か出ましたってネ、もう鉄仮面になって、何とも思いませんが」（無記名，1908）といった言葉を残し、自身が女子体育に関わっていることに多くの批判があったことを示唆しているが、それは女性が体操をするということに対して非常に大きな関心が寄せられていたということの裏返しでもある。

また、運動する女性に対する批判は生徒だけではなく指導者である教員にも向けられた。1903（明治32）年の「高等女学校教授要目」において、教授上の注意として「体操はなるべく女教員をして之を教授せしむべし」との規定がなされ、女性体操教員の養成が行われるようになった。女子体育の指導者を女性とすることは女子体育振興方策のひとつでもあり、その必要性が主張されたがなかなか定着しなかった（掛水，1985）。それは、以下に指摘されるような問題がひとつの原因となっていたと考えられる。

「況や、体育家を志した諸嬢は、体育方面の研究に急なりしたために、常識に欠けていたり、山出しの儘で、女子としての普通の礼儀作法には、寧ろ生徒の或者等が通じている様な場合も珍しくない。…長い胴、太った短い

足、それをあまり気持のよくない服に包んで、女の先生が跳び弾ねている有様は、新時代が生んだ悲惨事の一つではあるまいか」（玄，1925，p. 3）

このような批判があることは、体操教員を目指す女性たちもちろん認識していた。文部省の留學生としてイギリスで学んだ後、東京女子高等師範学校の教授を経て二階堂体操塾の校長となった二階堂トクヨ（1880-1941）は、自身が体操教員として赴任した際の心情を「女体操教師よ、気がひよ、後指指す世のそしりも人の笑も何のその、只一心不乱に汗を流すことになりました。」（二階堂，1917，p. 19）と語っている。実際に体操教員となった女性達が礼儀作法を欠いていたかどうかは定かではないが、そのような印象を与えた一因として、運動を行う際の服装の問題があったと考えられる。機能の面でも見た目の面でも女子体育にとって服装の問題は非常に重要であり、女子体育指導者はその多くが運動服の改善の必要性を主張している^{注7}。また、服装の問題は「女性らしさ」の問題とも深く関わっており、「女子の運動服装が女子としての特質を考慮しておらず女らしさを欠いたこと」（古屋，1929，p. 94）が、女子体育振興を阻害していると指摘された。男性に従属する存在としての女性に求められる「女性らしさ」や「しとやかさ」といった点を重視する旧来の女性観は、女性の作法や服装、身体観とも深く関わっており、変化させることは難しかったといえる。小山（1991）は、女子教育振興においても旧来の女性観の問題があったことを次のように指摘している。

「一方では現実に流布している旧態依然たる女性観ではもはや時代の変化に対応しえないことが自覚され、かといって男社会へ進出することによる女性の『男性化』は避けねばならない、というディレンマが女子教育家たちに存在していた」（小山，1991，p. 110）

このような認識は、女子体育指導者にももたれ

ていたのではないか。女性の『男性化』を避けつつ女子体育振興を行おうとする意図が、後述する女子体育振興方針に反映されていると考えられる。なお、女子体育を行うにあたって、ここまで「女性らしさ」や「規範」が重視されたのには、前述したように女子体育の対象が中流以上の家庭の者であったことが関係していると考えられる^{注8)}。そのために作法や規範と対立する女性らしくない体操という問題が強調され、女子体育振興を難しくしていたということを念頭に置いておく必要がある。

3. 体育の理論的研究の不十分さ

女子体育は女性観や美人観といった旧来の価値観と対立するものであったが、振興が難しかったもうひとつの要因として、同時期における体育に理論的研究の遅れがあったことを挙げることができるだろう。その結果学校において「体操科」は技術教科として扱われ、「学問」としてはみられていなかったことが様々な史料から読み取れる（藤村，1930；塚本，1996）。その原因ともいえる体育の理論研究の不備については、多くの体育研究者が指摘を行っていた。1904（明治37）年には高島平三郎が『体育原理』を出版し、「ただ余は此の書が体育の理論的研究を促すの導火線となりて一日も速に専門家の手に成れる完全の書を得るに至らんことを望むや切なり。」（高島，1904，pp. 3-4）と、専門家による体育の理論的研究が不十分であることを指摘した。また1910（明治43）年に出版された『体操遊戯講演集』は体育研究会が東京帝国大学において行った体操遊戯講演会における講演内容を編纂したものであるが、そこには緒言として「現今体操科の教授上最も急務なることは、体操科に関する理論的方面の研究と教授方針の確立とにあり。即ち、本公演会は其の必要に迫られて開催せられたるものにて、本書の公刊も亦其の目的に外ならず。」（体育研究会，1910，p. 1）との記述があり、体育指導者の間では体育の理論的研究の必要性が認識されていたと考えられる。

しかし、その後も体育の理論的研究が十分な成

果を挙げたとは言い難い。二階堂は国立体育研究所の設置の必要性を常々主張していたが、その理由として日本における体育研究が非常に遅れている状況を指摘した。

「今日我邦に於ける体育原理の研究はまだまだ微々たるもので、とても一般人士に徹底せしむる事などはむづかしい（ママ）、思うても見よ、斯界の最高学府？（ママ）たる高師校あたりの体育理論研究の状態は如何にと、実に見じめなものではないか、其機関其設備其人何れも頼むに足らぬものでは無いか、中枢部に於いてすら此状態である、ましてや其他の私立学校などは思うも気の毒な状態ではないか？」（二階堂，1922c，p. 14）

このような状況にあった体育は、社会的な承認を得るための理論的な裏付けを最新の医学や科学の知識に求めた。特に解剖学や生理学といった科学的基盤に立った体育は保健衛生的な立場をとることとなり、身体の健全発達を目的とすることによって体育の学問的価値がいまいなものになっていたといえるだろう。この状況についても二階堂は以下のように主張している。

「今日各方面に表はれたる風潮を見るに實際体育を司る教育者流が即ち体育法の技術者が単に一方面の体育研究者たる解剖的研究にのみ捕はれんとする傾きあるは疑ひもなく体育研究の墮落である…体育教育を司る教育家は技術の錬磨と共に解剖学にせよ生理学にせよ衛生学にせよ物理学にせよ哲学にせよ将た又優生学にせよ民族興亡の跡にせよ其の全般に通じ体育教育を実施するに必要な概念的知识を相関連的にこそ有するの必要あれ、一種の解剖的専門知識をのみ有したりとてその職務遂行の上に如何程の利益ありや且つ又進んで体育法を研究する上においてどれ程の利得ありや」（二階堂，1922b，p. 6）

そして、そのような状況を生んだ原因を、体育

指導者及び体操教員の資質の問題にみる主張が非常に多くみられる。東京女子体操音楽学校の校長であった藤村トヨ（1887-1955）は、「日本に体育が始まって五十年になるが日本に真の体育家が現はれない、外国の物真似的の体育家から物真似的の体育家を作る状態であることは惜しいことである」（藤村，1930，p. 385）と指摘する。それまでの体操教員の問題点を指摘する小原（1925）も、その改善点を指摘する。その内容は、人格を向上せよ、常識を養え、英語を学べといったものである。「体操教師が是れ迄、生徒乃至世間から概して軽視せられて来たのは、前にも言える如く、多くは体操教師其の人が自ら招きしものであって、此等は人格低く実力足らなかった結果であらうと思はれる」（小原，1925，p. 29）というような指摘は他の体育指導者と共通している^{注9）}。このように多くの体育指導者によって「人格の向上」が必要と指摘された体操教員であったが、人格の向上について具体的な方策が示されることはなく、その後も同様の指摘が繰り返された。

さらに、女子体育としての体操の研究が不十分であったことも女子体育の振興を阻害していた。1923（大正12）年に文部省編纂で出版された学校衛生叢書第二輯『女子体育』には、女子体育を奨励する必要が高唱されるようになったことを良い傾向であるとしながらも、「女子の体育運動は如何にすれば最適當であるかといふに至つては、未だ教育の実際家及び諸学者の意見が少ないやうである。」（文部省，1923，p. 3）と、実際の研究が進んでいない状況を指摘している。また、女子体育の内容について二階堂は、「男子の教材を劣悪にして女子の教材と心得、男子に役立たなくなった人を女子に適任として仕事をさせているのでは、国民の母たる女子の体育が気づかわれる」（二階堂，1922d，p. 18）と、女子体育を「男子体育」の教材を簡易化したものとして扱うことに対する批判を行っている。この点については藤村も同様に、それまでの女子体育が男子と同様の教材を用いて全く女子の身体の特徴を考慮してこなかったことを「真の研究ではない」と批判してお

り、体育の理論的研究が十分ではなかった当時の状況が推察される（藤村，1936b，p. 8）。

Ⅳ 女子体育振興方策の傾向と問題点

1. 理論的研究の欠如の原因

前述したように体育の理論的研究の必要性が指摘され、多くの体育指導者とその問題を認識していたにも関わらずその改善が進まなかった原因として、体育指導者の「主義」の問題を挙げることができる。同じスウェーデン体操という名称をもつ体操を学んできたはずの川瀬源三郎、井口あくり、二階堂トクヨ、永井道明もそれぞれ異なった指導観をもっていたことがこれまでに指摘されている（武田，2010）。永井もこの点について、「所謂、瑞典体操リング・システムと言つても、米国のものと、英国のものと、丁抹のものと、而して本国瑞典のものとは模様が違ふし、同じ本国瑞典のものでも時代により人により必ずしも同一ではない。」（永井，1940，p. 27）と述べている。このように、普通体操や兵式体操、スウェーデン体操といった体操の形式の主張だけではなく、同じ体操であっても指導者によって異なった主義があったことが原因となって、共通した指導理論を確立することが難しかったのではないかと考えられる。指導者の主義主張によって多くの体操が行われている状況について小瀬は以下のように指摘する。

「科学的根拠に立つて何等各教材の本質を究明しないで、ただ目新しきが故に、珍しきが故に奇抜であるが故に、課した従来の各教材は転々として遷り変つた。而も極く一部分に偏した教授が次から次からと、止めどもなく行はれている。即ち垂鈴体操—棍棒体操—球竿体操—柔軟体操—矯正術—美容術—行進遊戯—独逸式徒手体操—瑞典式体操—競争遊戯—唱歌遊戯—動作遊戯—表情遊戯—律動遊戯—動情遊戯—スクールダンス—童心遊戯—競技—ニールスブック式体操—舞踊等々、内容が同じであっても名称が変れば随喜の涎を垂

らしてそれを真似した如きは、何れも教材の本質を究明しない証拠である。」(小瀬, 1934, p. 33)

この指摘をとおして、同じ名称を用いていても指導者によってその指導内容が異なる体操が行われていたということ、違った名称を用いていても内容が同じ体操が行われていたというようなことが同時に起こる状況であったということがみえてくる。このような状態の背景には、体育界における一種の「派閥」が関係していたと考えられる^{注10)}。普通体操とスウェーデン体操の学校体操としての是非論争についてはこれまでに多くの研究が行われているが(木下, 2008; 武田, 2010), これはまさしく女子体育が制度的に確立するのと同時期に起こったものである。

日本における普通体操の第一人者である坪井玄道から多くを学び普通体操を支持していた藤村トヨは、学校体操としてスウェーデン体操が採用されてからも自身が校長を務める東京女子体操音楽学校にいて普通体操中心の教育を行っており、文部省へ意見書を出す際には坪井から「お前の研究でも世間では坪井がお前を使って言わせると誤解せられるから発表は止めよと注意せられた」(藤村, 1953, p. 152)という。また、文部省の留学生としてイギリスでスウェーデン体操を学んだ二階堂トクヨも、日本の体育界の状況について以下のように述べている。

「又何とやら云ふ会はズラリと名前を並べて如何にも全員一致同心協力のやうに見せかけられているが、もともと犬と猿見たやうな人達の集り、そこをてらつたところを見るだけでも胸がわるいとみんなは云つて居る、虚勢を張つた名前だけの結束は到底真の事業をやり得るものでない。」(二階堂, 1922b, p. 56)

このような状況にあった体育は、それぞれの体育指導者の主義の対立によって共通した理論的枠組みを示すことが難しい状況にあったといえるだろう^{注11)}。なお、理論的研究を行うための方策と

しては「国立体育研究所」設立の必要性が主張されていたが(井口ほか, 1906, pp. 451-455; 湯原, 1915), 実際に国立体育研究所が設置されるのは1924(大正13)年のことであった。このような状況が体育の理論的研究を遅らせ、体育や体操教員の社会的評価が低く留められたひとつの要因となっていたと考えられる^{注12)}。

2. 体育振興方策としての女性観修正の試み

制度として確立し、身体改善の手段としての必要性が説かれた女子体育であったが、制度の改善や最新医学による理論的裏付けだけでは体育の学問的な価値は認められず、社会的評価も低い状態で奨励は困難であった。理論的な研究が進まない以上、たとえ旧来の女性観に反していても行うべきという説得力に欠けていたからである。そのため、女子体育指導者は女子体育振興を目指す過程で制度や理論による裏付けを行うことと同時に、旧来の価値観を変化させる必要があった。そこで用いられたのが、「健康と美人」に関する主張であると考えられる^{注13)}。日本女子大学の創設者である成瀬仁蔵(1858-1919)は、著書『女子教育』(1896)の中で「本邦女子体育の振起策」として、美人観を変更することの必要性を主張している(成瀬, 1896)。同書において成瀬は「健康であること」を美の基準とすべきであると指摘している。井口あくりも、身心の健康美が十分に発揮されなければ、本当の美人とは言えないと述べている(井口, 1907)。また、当時一般的になってきた化粧との関連から健康の必要性が説かれることも多かった。戦前の代表的体育研究者である永井道明は、「身体が調和して発達して居らねば美しい(ママ)着物も無駄であります。又紅、白粉を以て飾るには皮膚が良くなければなりませんそれは身体が健康で血液の循環がよくなければ得られないことであります」(永井, 1913)と、健康と美の関係を指摘している。また、健康であることを女性の美の基準とすることの必要性は女性ばかりにではなく男性にも理解が求められた。

「少く(ママ)とも今後の日本男子は、諸種

の病毒を青白い皮膚に包んで居る女子を以て、美人などと誤解するやうな了簡では、ひとり自家事業に成功せぬばかりでなく、我が国民の後継者として、あはれ亡国の民たらしめる大罪人である。」(眞仙, 1908, p. 38)

戦前期における美人観が、ここに挙げたような議論にのみ終始していたわけではない。その精神性を重視する議論や、旧来の価値観を肯定する意見も多くみられたが、対象を女子体育の周辺に限定すると「健康と美」、「肉体美」を重視する論が中心であった。一方で、このような流れに対する批判も行われるようになる。たとえどんなに病的であっても、痩せた色白の女性の方が美人である、というような主張が雑誌などでなされるようになる(井上, 1995, p. 165)。これは、一般的であったはずの美人観を再度確認しなければならない程に「健康的な美人」という価値観を広めようとする動きが活発であったということを示している。明治後期の日本において、美と健康を結びつけることが重要視されていたことがよくわかる事例である。ひとつの振興方策として「健康」と「美人」が結びつけられていったことは、女子体育を「女性らしさ」と対立しないものとして振興する上で重要な戦略であったと同時に、「不健康」であることを肯定的に捉えるような傾向に対するひとつの対策であったといえるだろう。旧来の美人観としての「不健康な美人」という概念を乗り越えるために用いられたのが新しい美人観としての「健康的な美人」という概念であり、このような主張が積極的に用いられた背景には同時期における女子教育思想としての「良妻賢母」の内実の変化¹⁴⁾や「職業婦人問題」にみられるような女性の社会進出によって起こった旧来の女性観の変化が深く関連している。それぞれの場面で変化していった女性観が相互に影響しあうことによって、より積極的な存在としての女性に関する価値観を形成していったと考えられる。しかし、「健康的な美人」に関する主張は、「女性らしさ」を重視したことによって女子体育を肯定する言説を不徹底なものとしてしまう結果をもたらした。こ

の点について高橋ほか(2005)は、「〈女子〉体育は女性イメージと結び付いたときに普及が抑制され、男性イメージと結び付いたときに普及が促進される」(高橋ほか, 2005, p. 134)という状況があったことを指摘している。「健康」であることを肯定し女子体育を振興するひとつの手段として用いられた「健康的な美人」論の限界は、理論的な問題があった体育自体を改善するものではなく、さらに女性イメージと女子体育を結び付けることによって女子体育振興を不徹底なものにしてしまうという点に限界があったといえるだろう。

女子体育を振興する方策として、上述したような価値観の変更を図る動きがみられ、新聞や雑誌といった様々な媒体をととして体育の効用や必要性が主張された。その中でも「国民の母」としての女性の身体的重要性を主張する言説は、体育に関連する記述の大部分においてみられる非常に特徴的なものであるといえる。「女子の身体は、子孫に遺伝すべけれど、女子の身体、強健ならざらんには、国民の強健なることを望むべきかは」(三輪田, 1897, p. 101)と、明治期の女子教育者である三輪田真佐子が指摘するように、母としての女性の健康は、その子どもの健康にも影響すると考えられたのだった。このような考えが一般的になった背景には、明治末の日本における進化論の一大ブームが影響していると考えられる。丘浅次郎著『進化論講話』は1904(明治37)年に出版され、平易な叙述によって大ベストセラーになった。進化論は明治初期に翻訳され知識人層のあいだでは流行をみせていたが、丘の著作をはじめとする解説書の出版に伴い、進化論は知識人には必要不可欠な「教養」であると同時に次第に通俗化していった(右田, 2003)。その結果、進化論の社会ダーウィニズム的な理解による「適者生存」「弱肉強食」という発想が広く認められるようになり、強い子どもをつくるには強い親が必要という認識が強まっていった。身体を改善する手段としての体育は、「科学」のお墨付きを得ることによってその有用性の主張を強めたのだった。

また、以下の指摘は同時期における女子体育の必要性を主張する言説の特徴を非常に簡潔に表し

ている。

「女子には出産の天職がある。しかも強健なる子女を生むべき任務がある。一家はこれによって後継者を作り、一国はこれによって次代の国民を得るのである。而して強健なる母体より出生せる子は強健であり、薄弱なる母体より出生せる子は薄弱である。」(雑質, 1924, p. 56)

このような指摘の背景にみられるのは、優生思想に基づく体育論である。優生思想とは、「優生学が一歩なくとも自己理解の上で『科学』なのに対し、さらに『科学』の範囲を超えて、実践や政策を直接・間接に支える思想としての特徴を獲得したもの」(藤川, 2008, p. 5)であり、事実体育の実践を支える思想として重要な意味をもっていたといえるだろう。『婦女新聞』の1911(明治44)年第565号の社説「体格問題」では、日露戦争に勝利したのは日本人に大和魂があるからであって、体格には問題があると指摘した上で「将来の国民の体格を如何にして改良すべきか、今日の体育を盛にして各人の強壯を図ると同時に、新に配偶者を選ぶ者をしてこの点に大なる注意を払わしむにある」とし、優生結婚の必要性を説いている。優生思想の学問的言説については、大正期において増大している(藤川, 2008)。

3. 女子体育振興方策の問題点

女子体育を振興する方策として、上述したような価値観の変更を図る動きがみられ、新聞や雑誌といった様々な媒体をととして体育の効用が主張された。しかし、そのような動きに対して批判的な見解をもつ体育指導者もあらわれた。二階堂は女子体育振興のための宣伝の状況について以下のように指摘している。

「体操をすると身体が丈夫になる、精神が活発になる、だから体操をせねばならぬと、功德から説き起こして体操を児童や生徒にやらせるのは寧ろ愚である、然るに今一般のやり

方を見るに余りに理屈づめに効果を予知させる事に工夫を凝らして居る様だ、…体操の功德を説き、効果を見つけさせて以て、体操科奨励の策となす如きは、思えば甚だ危険な教育法であって、考慮ある者のとるべき道ではない。」(二階堂, 1922e, pp. 21-23)

この指摘からも、この時期における女子体育の振興方策が体育に付随する価値の主張を中心とした手段論的傾向を示していたことが推察される。女子体育の必要性が叫ばれながらも体育の理論的研究が十分な成果を挙げられずにいたことから、必然的に体育振興の方策はその価値を主張する傾向を強めていた。「健康と美人」に関する主張はその一つの例であるといえよう。

さらに二階堂は、女子体育の必要性の主張が「国民の母」としての役割を強調する傾向にあったことに関しても、以下のような言葉を残している。

「おおそう母は御身等に改めていきかすべき一事がある。子等よ、母はこの日頃如何にも志士をてらう義人を装うて、ヤレ民族のためだの、ヤレ国家のためだのとえらうな事ばかり世間に揚言した、…この自分のすき勝手な仕事に勿体をつけようとて、ヤレ八千万民族のためだの、大日本帝国のためだのと母は虚勢だったのである、思えば面目ない」(二階堂, 1922a, 巻頭)

女子高等師範学校を退職し二階堂体操塾を開塾するにあたって書かれたこの記述は、同時期に主張された女子体育の意義が国家的な視点から語られることが多かったことを考えると、非常に大きなインパクトをもっているといえよう。女子体育を振興するために理論的裏付けを必要としていた当時の状況が垣間見える。二階堂の言動が首尾一貫せず一見矛盾したものであることはこれまでも指摘されるが(穴水, 1995)、その時々々の体育指導者の問題意識を示すものとして重要な意味をもっていると考えられる。

さらに、このような状況にある中行われていた学校体育について小瀬は、以下のように批判を行った。

「従来の体育は、その目的観に於ても、方法観に於ても、教材観に於ても不純であった。大それた邪道に身も魂も打ち込んでいた。体育の本質に即しても顧慮などは殆んどなかった。そうして教師の好き嫌いや、偏狭な独断的体育観や、学校の名誉や、環境の事情や、其他種々な要求に依つて利用化され、方便化され、隷属化され、体育本来の独自の光彩の発揚を見ることは不可能な状態であった」(小瀬, 1934, p. 75)

二階堂や小瀬の批判を通してみていくと、女子体育指導者はその時々には適合する理論的裏付けを選択し、「女子体育の普及」という目的達成のために活動を行っていたと考えられる。女子体育の普及にとって最も大きな障害は旧来の女性観であり、理論的研究と同時に啓発活動を行うことが必要不可欠であったと考えられる。この活動は、女子体育に関する価値を積極的に生み出すことによって行われた。「啓蒙」の過程が「一見中立的な、あるいは快適さや福祉の増進といった、もっぱらプラス価値的な相貌をとりながら進む」(福井, 1995, p. 99)と指摘されるように、女子体育も指導者から積極的な価値が付与されることによって社会的評価が変化していったと考えられる。しかし、そのような流れは体育の理論的研究をおろそかにする傾向を強めることにつながり、結果として女子体育の質を低いものとしてとどめることになった^{注15)}。

V ま と め

これまで先行研究では戦前の女子体育の振興が困難であったことが指摘されてきたが、本稿ではその要因となった旧来の価値観や体育の状況について検討を行った。その結果、女子体育の対象が比較的出身階層の高い中等教育段階の女子生徒を

対象としていたことが女子体育に対する批判を強めていたことが明らかになった。加えて、旧来の美人観や「佳人薄命」といった「虚弱」を肯定的に受け止める価値観の存在が女子体育振興を阻んでおり、体育指導者はこれらの問題を解決する必要があった。

しかし、普通体操やスウェーデン体操等複数の体操が外国から持ち込まれたことによって、体育指導者の間に主義の対立がおこり、共通する体育の理論的枠組みを示すことが難しい状況があった。結果として、体育の理論的研究はなかなか進まず、体操教員養成制度の問題とも関わって体操科の社会的評価が低く留められるひとつの原因となっていた可能性が示された。そのため、女子体育振興の阻害要因となった問題の解決は困難であり、そのため体育指導者は体育の手段的な側面を強調することにより女子体育の振興を図っていった。様々な要因によって振興が困難な状況の中で行われた大正期における女子体育振興は、体育を改善することよりもより効果的に宣伝することに重きが置かれていたということができよう。そのようにして行われた女子体育振興は、体育指導者の中からも批判を受け、女子体育の質を低くとどめる一因となったと考えられる。

注

- 注 1) 今村嘉雄によれば、「たとえば体操で足を高くあげたり、横木や跳箱にまたがったりすることはさけられたし、徒手体操での開脚姿勢での運動は第二次大戦まで女子教材から省かれていた。」(今村, 1959, p. 27) という。
- 注 2) 「女子の体育は如何にしても大に奨励せざるべからず。されど一般の女子に対して之を望むも到底栓なし。惟、学校に於ける女子体育を奨励する一方あるのみ」(丸山, 1902, p. 35) と指摘されるように、進学しない一般の女性はそのほとんどが労働者であったから、女子体育の普及は学校を中心として行われることになった。
- 注 3) 藤村トヨは女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)を病氣退学しているし、二階堂トクヨは同校で何度も病氣退学の危機にさらされていた。入学試験などの競争率が非常に高かった明治期から大正期においては、勉強のしすぎによる睡眠不足

や運動不足が重なることによって児童・生徒が体調を悪化させることが多かったという（二宮，1926）。

注 4) ここにみられる「虚弱」に対する認識は，男女に共通するものであったといえる。この中で女子体育に特化した問題が何であったかという点，男子に求められた「強健」という概念は，女性に求めるにはあまりに「男性的」なものであり，さらには以下に示すように「健康」という概念でさえ当時の「美人観」と対立するものであったという点に見いだせるだろう。この問題点を解決するために用いられたのが「健康的な美人」という概念を用いた女子体育振興方策であった。

注 5) 女子体育を表現するにあたって多用された言葉に「御転婆」がある。現在の意味として受け取れば「活発で女性らしさを欠く」という程度に読み取れるものであるが，実際には「御転婆」はより強い意味をもった言葉であったと考えられる。高橋・松井（2004）によれば，「御転婆」は「女の子は慎ましくあるべき」という規範から逸脱する性格・言動を取り立てて表現する社会習慣がなくなったため，現在はほとんど使用されない語となったという。つまり，「御転婆」は旧来の固定観念的規範から逸脱する事柄を取り立てて表現する言葉であるということであるが，その意味としては「慎みがない，軽はずみ，はすっぱ」等と気質や言動に対して「本来の女性があるべき姿から劣る」と見なされる悪いイメージを強く打ち出す傾向があった。そのように考えると，女子体育をすることが「御転婆」であると表現されたことは，女子体育が単に女性らしさを欠くものであるというだけではなく，女性の規範と対立しあるべき姿から劣った存在として女性を形成するものとしてイメージが構築されていった可能性が考えられる。

注 6) 井口は秋田魁新報（明治40年9月24日）に掲載された「井口女史の談話」において，「井口あくりは日本一の醜婦である。結婚したくてももらい手がない。人生の惨は，これにまさるはあるまい。まことに彼れの境遇は惨の極である。これがために彼れが内心の煩悶苦悩は言外に絶している。彼れは，此の煩悶此の苦悩を滅却せんために，洋行の途に上りて，所謂おてんば術なるものを研究し，帰り来って日本国中の女性を，かつて自分の苦悶不平を癒する犠牲に供し，盛んにおてんば術の伝授につとめ，自分と同型に類化せんとしつつある」（秋田魁新報，明治40年9月24日付）と言われたと語っている。だが，伊藤銀月の著書

『当世一百人』（伊藤，1905）を確認すると，この井口の表現はかなり誇張されたものであることがわかる。しかし，ここで重要なのは，井口が伊藤の著書における記述を後に語ったように受け止めたという点であろう。井口が女子体育を行うにあたって様々な批判を受けていたことを考えると，秋田魁新報の記者に語った内容は伊藤の記述のみではなくその他に受けた批判も含んだものである可能性が高いのではないだろうか。

注 7) プルマーをアメリカからもち帰り日本に紹介したのは井口あくりである。二階堂体操塾（現日本女子体育大学）校長になった二階堂トクヨも服装の改善の必要性を説き，大正8年に洋装制服を体操塾に導入した際には雑誌に紹介されている（『婦人画報』1919，口絵）。また，東京女子体操音楽学校（現東京女子体育大学）校長であった藤村トヨは1914（大正3）年の東京大正博覧会に出品した「改良女学生服装並に改良奨学女生徒服装」によって褒状を受けている（東京府，1916）。なお，同時期には和服の衛生上の欠点を除いた改良服を考案しようとする動きが婦人雑誌を中心にみられ，運動の邪魔にならないという点のみではなく，帯による圧迫で形成される姿勢の改善が目指されていた（夫馬，2007，p. 19）。

注 8) 「女子の体育に於ける苦心は大方の人は認め得べし。吾輩の如き常に大声疾呼する者すら吾母，吾妻，吾姉妹吾女に対し，断行すること能はざるなり。況や他の婦女子をや。」（丸山，1902，p. 34）という指摘や，「身体を真直ぐにして居ると，それでは余り威張ったやうだ，余り傲慢のやうで，女にはどうも宜くないからと，今までのお翁さんお嬢さんの考で，もう少し身体を曲げたら宜くはないかと云ふやうなことになる」（井口，1903，pp. 19-20）という指摘からも，女子体育と旧来の女性観の対立が読み取れる。

注 9) 体育指導者及び体操教員の資質の問題については，春日ほか（2010）を参照。

注10) 戦前の体育界における体操の系譜とその対立軸について清水（1996）は，「それは，その当時の権力の中枢にいる個人の身体経験（海外留学を含めて）を基にした個人（の身体）と個人（の身体）との格闘，すなわちハビトゥスとハビトゥスとの格闘の歴史といってよい。」（清水，1996，p. 144）と指摘する。

注11) このような状況があったためだろうか，藤村は『女子と子供の体育』発刊に際して「本会は飽迄国家的立場に立つて，真に女子の体育を向上させ

たいといふ一念に外ならないのである。誰を除外するとか、何の閥とか、何色とかといふことは絶対にないものであるといふことを御了解願ひたいと思ふ。」(藤村, 1936a, p. 11) との緒言を残している。

注12) この因果関係についてはより詳細な検証が必要であると思われるが、この検証は本稿の主旨から離れるものであり文字数の制限上からも詳細に述べるのが難しいため、別稿に譲ることとした。

注13) 女性の健康と美に関連づけた最初の議論は、大日本私立衛生会が明治初期にコレラが蔓延する状況の改善のために行った「衛生美人」構想にあると思われる。1884(明治17)年に提唱された「衛生美人」は、旧来の美人が不健康に陥りやすい傾向を改善するために、健康的な身体をもつ女性を美人と定義づけようとした試みである(井上, 1995)。その試みは失敗しているが、その議論の中で健康な女性を美人として定義するよりも、旧来の美人に体育法を教えて健康にする方が合理的ではないかという議論が行われている。この流れが女子体育振興において「健康」と「美人」が大きく取り上げられる端緒となったのではないかと考えられる。

注14) 女子体育が制度的確立をみせた明治30年代以降、女子教育の発達が知識による内助や国民的自覚をもたらしそれが国家の富強に結びつくという理論から、女性たちには従来とは異なった「積極的な良妻」としての役割が求められた(小山, 1991)。

注15) 成瀬(1896)、井口ほか(1906)、藤村(1930)などが女子体育振興方策についての記述を残しているが、それらの指摘を総合すると女子体育を振興する上で重要であると考えられていたのは1.体操教員及び体操教員養成制度の改善、2.体育の理論的研究、3.体育と「旧来の女性観」との対立の改善、の大きく3点であるといえる。

文 献

- 天野正子編著(1986) 女子高等教育の座標。河内書房：東京。
- 穴水恒雄(1995) 二階堂体操塾建塾の精神の現代的意義。日本女子体育大学紀要, 25: 92-101。
- 藤川信夫(2008) 柳沢教育学における日本人種の遺伝学的優秀性の事後的構成—人種主義と異文化否定のジレンマを超えて—。教育学における優生思想の展開—歴史と展望。勉誠出版：東京, 3-37。
- 藤村トヨ(1930) 学校体育論。一成社：東京。
- 藤村トヨ(1936a) 緒言。女子と子供の体育, 1(1): 11。
- 藤村トヨ(1936b) 女子体育の振興に就いて。女子と子供の体育, 1(2): 6-8。
- 藤村トヨ(1953) 私の歩んできた道(2)。東京女子体育大学紀要, 3: 151-156。
- 福田真人(1995) 結核の文化史。名古屋大学出版会：愛知。
- 夫馬佳代子編著(2007) 衣服改良運動と服装改善運動。家政教育社：東京。
- 玄 洋生(1926) 若き女流体育家と服装。健康の女性, 2(8): 3。
- 井口あくり子(1903) 女子体育に就いて。をんな, 3(5): を9-を26。
- 井口阿くり・可児 徳・川瀬元九郎・高島平三郎・坪井玄道(1906) 体育之理論及實際。国光社：東京。
- 井口あくり(1907) 女子体育談, 秋田魁新報, 明治40年9月24日付。
- 今村嘉雄(1959) 女性観と女子体育。女子と子供の体育, 1(1): 23-27。
- 井上章一(1995) 美人論。朝日新聞社：東京。
- 伊藤銀月(1905) 当世一百人, 第二巻。隆文館：東京。
- 掛水通子(1985) 「女子体育は女子指導者の手で」の出現をめぐる一考察：大正初期まで。東京女子体育大学紀要, 20: 1-10。
- 上沼八郎(1968) 近代日本女子体育史序説。不昧堂：東京。
- 春日芳美・友添秀則・吉永武史・稲葉佳奈子・岡部祐介(2010) 明治期の中等教育における女性体操教員像の検討。スポーツ教育学研究, 30(1): 25-36。
- 菊池城司(1967) 近代日本における中等教育機会。教育社会学研究, 22: 126-147。
- 木下秀明(2008) 明治期末学校体操混乱期における東京高等師範学校附属中学校の「鉄棒体操」採用に関する史的考察。体育学研究, 53(1): 11-28。
- 小山静子(1991) 良妻賢母という規範。勁草書房：東京。
- 真嶋亜有(2004) 近代日本エリート層における身体美醜と人種意識を巡る社会・文化史的研究—1853年—1926年—。国際基督教大学。
- 丸山正彦(1902) 女子の体育。内外名家体育論集：32-36。
- 右田裕規(2003) 明治期知識人層における生物進化論の流行再考—「人獣同祖論」のインパクトをめぐる—。科学史研究第Ⅱ期, 225: 1-10。
- 三島通良(1902) 女子の体育。内外名家体育論集。日本体育会, pp. 217-269。
- 三輪田真佐子(1897) 女子体育要言。国光社：東京。

- 文部省（1923）女子体育．学校衛生叢書第二輯，右文館：東京．
- 無記名（1908）井口女史の談．秋田魁新報，明治41年8月16日付．
- 永井道明（1913）体育上よりみたる美人．体育講演集，健康堂体育店：東京．
- 永井道明（1940）余が六十八年間の体育的生活並にその感想．体育史の研究，健文館：東京．
- 成瀬仁蔵（1896）女性教育．青木恒三郎：東京．
- 二階堂トクヨ（1917）体操通俗講話．宝文館：東京．
- 二階堂トクヨ（1922a）子等に語るの辞，わがちから，2(3)：巻頭．
- 二階堂トクヨ（1922b）泣き言ならべ．わがちから，2(3)：53-56．
- 二階堂トクヨ（1922c）高潮せる体育気分．わがちから，2(7)：12-15．
- 二階堂トクヨ（1922d）自覚せよ．わがちから，2(8)：15-23．
- 二階堂トクヨ（1922e）打算的に体操をやらすな．わがちから，2(8)：21-23．
- 二宮文右衛門（1926）学校体育．目黒書店：東京．
- 小原正忠（1925）新体育家の思潮．寶文館：東京．
- 小野芳朗（1997）〈清潔〉の近代．講談社：東京．
- 小瀬峰洋（1934）学校体育と女子体育．文書堂：東京．
- 雑賀三省（1924）女子体育学．廣文堂書店：東京．
- 清水 論（1996）体操する身体—誰がモデルとなる身体を作ったのか/永井道明と嘉納治五郎の身体の間—．年報筑波社会学，8：119-150．
- 眞仙道人（1908）妻としての美人．成功，13(6)：445-449．
- 体育研究会（1910）体操遊戯講演集．大日本図書：東京．
- 高橋一郎・萩原美代子・谷口雅子・掛水通子・角田聡美（2005）ブルマーの社会史—女子体育へのまなざし—．青弓社：東京．
- 高橋永行・松井真人（2004）辞書記述と言語使用の実際—日英語における「御転婆」を意味する言葉をめぐって—．米沢国語国文，33，pp. 118-134．
- 高島平三郎（1904）体育原理．育英社：東京．
- 武田正司（2010）日本におけるスウェーデン体操の導入と展開—井口あくりの場合—．児童教育学会研究集録，21：21-40．
- 竹内 洋（2003）教養主義の没落．中公新書：東京．
- 竹中理恵（2004）大正中中期から昭和初期における非就学青年女子の身体に関する議論について—『処女の友』（1918-1941）及び『女子青年』（1931-1941）から—．スポーツ史研究，17：77-87．
- 東京府（1916）東京大正博覧会審査報告一卷．東京府：東京．
- 塚本はま（1996）新編教えるということ．筑摩書房：東京．
- 角田聡美（2000）女子体育における身体への政治—『婦人衛生会雑誌』の分析を中心に—．スポーツ社会学研究，8：73-85．
- 湯原元一（1915）新青年団．目黒書店：東京．

（平成23年6月22日受付）
（平成24年3月12日受理）